慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	序
Sub Title	Introduction
Author	巽, 孝之(Tatsumi, Takayuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1998
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.75, (1998. 12) ,p.370(11)- 372(9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本晶教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00750001-0372

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

序

巽　孝之

わたしが初めて山本晶先生にお会いしたのは，本塾法学部英語助手に採用された1982年４月のことであるから，それほど昔のことではない。当時は故・大橋吉之輔先生もご健在であったけれども，他大学出身のわたしは，山本先生のご専門が同じアメリカン・ルネッサンス時代の文学であるという点に魅力を覚え，旧大学院棟で行われていた大学院の授業に出席させていただいた。現在はアメリカ女性詩研究で活躍中の渡部桃子，朝比奈緑の両氏と机を並べていたのを，昨日のように思い出す。各人の研究に基づく発表中心の授業であったが，先生が随所で披瀝される学識ゆたかなコメントは何ものにも代え難く，以後現在にいたるまで，わたしは先生とお話しする度に研究の種子とも呼べるアイデアをいくつも賜ってきた。その時にはまだ目に見えなくとも，しかしのちに大きく開花するような発想の種子。それは，じっさい研究内容だけにとどまらず研究制度の側面においても――とりわけ昨今では先生の慎重を期したご尽力によってとうとう実現することになった大学院博士号請求論文に関する内規においても――惜しみなく播かれている。ただし先生ご自身がそうした絶大な影響力を果して自覚しておられたかどうかは，また別の話である。

というのも，今回この記念号を編むにあたりいろいろご相談させていただいた折に，そもそも慶應義塾大学文学部アメリカ文学専攻がいったいどのようにして成立したのかという話題におよび，これまで知る由もなく，先生ご自身さえ忘れかけておられた真相に接したからだ。本塾イギリス文学専攻の発展に関しては西脇順三郎・厨川文夫両先生のお力が大きかった

ことが，広く知られている。ではアメリカ文学専攻はどうだったのか。厨川先生や岩崎良三先生がアメリカ文学史を担当された時期もあったと聞くが，しかし長い間，アメリカ文学専攻は存在していなかったのが実状である。だが今回，当時の詳細を伺い，わたしはそもそもの発端が山本先生ご自身のご意志にあったという事実を知った。

事の起こりは，1960年代半ば，日吉勤務であられた大橋吉之輔先生に，某国立大学への移籍の話が持ちかけられたことにある。もともと山本先生は学部から大学院にかけては厨川先生に師事され，1961年に完成された学部の卒業論文ではエスペラントを中心にした世界語の問題を，1963年に提出された修士論文では古英語のロマンス『タイアのアポロニウス』を中心にした統語法の問題を扱っておられた。つまり，当時の先生は，アメリカ文学どころか，伝統的な古代中世英文学者としての第一歩を踏み出しておられたわけである。ところが1963年４月，修士課程修了と同時に語学担当助手として本塾に勤務されることになり，この時，日吉で大橋先生と研究室が同室になられたことが，先生の以後の方向を大きく変えてしまう。じつは山本先生はすでに1957年，慶應義塾に入学された１年次の折，クラス担任が大橋先生であった。それ以来のご縁か，以後，慶應義塾が日本アメリカ文学会の事務局を引き受けるときに，「たまたまいちばん若手だったため」畑違いであるはずの山本先生がお手伝いをされることになる。そのお仕事を続けながら，山本先生はアメリカ文学に携わる研究者たちに対し，急速に親近感を抱かれるようになっていった。そんな折も折，大橋先生移籍の話が舞い込んだのだから，これを慶應義塾の大きな損失と考えられた山本先生は，矢も楯もたまらず，一世一代の決心の上，厨川先生へ長文の書状を認められる。「時代の要請としてのアメリカ文学研究」を痛感されたためという。1965年頃のことである。

その甲斐あって大橋先生は三田へ移籍されることになり，慶應義塾大学文学部アメリカ文学専攻の種子が植えられた。ほどなくして大橋先生のたってのご要望もあり，山本先生ご自身がアメリカ文学へ専門を変更される。年譜によれば，1966年10月には日本アメリカ文学会全国大会でハーマ

ン・メルヴィルの『白鯨』に関する発表をしておられるので，それ以前の段階すなわち1964～6年の何らかの時点であろう。そして1970年のアメリカ留学をはさみ，こんどは1972年に先生ご本人の三田への移籍が決まる。基本的に「語学教育」を愛する先生にとって，所属変更は不本意であったとも聞くが，にもかかわらず，そもそも先生がきわめて公平な判断に従って大橋先生を慶應義塾に引き留められるというご決断がなければ，かてて加えて，先生ご自身がアメリカ文学者として再出発するというご英断がなければ，今日に連なるアメリカ文学専攻そのものがとうてい存在し得なかったはずである。

かくして山本先生は，それまで存在しなかった専攻の種子を播かれ，しかも以後のアメリカ文学教育におかれては，専攻をきわめるとはどういうことかを，身をもって体現された。このことを考えるとき，わたしには先生のお姿が先生の愛してやまないアメリカン・ルネッサンス作家ヘンリー・デイヴィッド・ソローと重なり，『ウォールデン』の「豆畑」の章における以下の洒脱な一節を思い起こす。“I was determined to know beans.”

*

以来，四半世紀もの歳月が流れ，慶應義塾大学文学部アメリカ文学専攻は，1997年10月には山本先生のご指導のもとに第36回日本アメリカ文学会全国大会を主催し，1998年4月には先生を中心に数年間継続した共同研究の成果『物語のゆらめき――アメリカン・ナラティヴの意識史』（南雲堂）を世に問う。先生に対しては，いくら感謝の言葉を重ねても足りるものではない。

ここに捧げる『藝文研究』記念号は，そのような山本晶先生の学恩に辛うじて報いるための小さな，しかし真摯なる最初の一歩である。